

新 秋 剣 連

発行
秋 田 県 剣 道 連 盟
〒010-0914
秋田市保戸野千代田町 14-12
SAKAEビル 2F-B
TEL 018-883-0680
FAX 018-883-0663
E-mail a-kendo@abellia.ocn.ne.jp
http://akitakenren.com/

第45回全国中学校剣道大会・個人第三位

平成27年8月22日(土)～24日(月) 秋田県立武道館



秋田市立山王中学校 木村 弘人

僕は秋田で開催された第四十五回全国中学校剣道大会に出場しました。昨年は団体戦のみの出場でしたが、今年は団体戦と個人戦の両方に出場できました。

大会初日には、個人戦の四回戦までが行われました。僕は試合が近づくにつれ東北大会での一回戦敗退が頭に過ぎり、緊張して体が固くなっていました。そんな状態で試合に臨んだので、やはり思うように動けませんでしたが、しかし、絶対に勝つという気持ちから、長い延長戦を制し、一回戦を突破することができ

ました。二回戦以降も延長戦の連続でしたが、かえって緊張が解け、徐々に自分の思い通りに動くことができようになり、最終日に残ることができました。

二日目の団体戦では、決勝トーナメント一回戦で敗れてしまい、最終日に残ることができませんでした。最終日は、個人戦だけの出場となりました。試合をやる前に、チームメイトや先生方など多くの人々から、声援をいただき、勇気をもらうことができました。そのおかげもあって、初日とは違い緊張せずに試合に臨むことができ、準々決勝を突破することができました。

準決勝は、優勝した神奈川県潮田中の重黒木選手に敗れてしまいました。自分が、自分の力を出し切り、日本一の選手と試合ができたことにとっても満足しております。

僕が全中で三位になれたのは、決して一人の力ではなく、監督の岩船先生やご指導を下さった先生方、一緒に練習してきた仲間たち、支えてくれた家族、秋田全中開催に協力して下さい下さった方々の力があってこそ成し遂げられたのだと思います。

これからの人生で、全中で三位と

いう成績は一生の宝物ですが、それ以上に、山王中剣道部員として厳しい練習を乗り越えてきたことや、仲間と共にうれしさや悔しさをわかち合ってきた日々は、忘れることのできない一生の思い出となりました。

これからも、感謝の気持ちと常に努力することを忘れず、精進し、剣道も人としても、立派な人になりたいです。



八段を拝受して

鎌田 耕平

五月の京都八段審査会において念願がかない八段位をいただく事が出来ました。

長い挑戦の末の合格でしたのでその時はもちろん、未だに信じる事が出来ないでおります。負け惜しみではありませんが長く時間がかかった分、たくさん事を学ばせてもらったと思っています。特に秋田わか杉国体のアドバイザーコーチ加藤浩二先生の、とにかく竹刀を振れ、「打ち込み、かかり稽古、切り返し」をしろ！が昇段に大きく近づいたと思っています。と同時に八段挑戦の資格が出来たからの挑戦ではなく、八段に相応しい力と心、更には人間が出来たかどうかが重要であると感じました。

また、道場での指導の中で初めて竹刀を握る子供たちに正しい剣道を教えるため、自ら基礎基本に立ち返らなければいけなかった事も大きかったと思っています。



実は今回の京都審査で挑戦をやめようと内心思っていました。一次は通っても二次でだめ、手ごたえのある立ち合いでもかすりもしない！何をしてもだめ！さらには一〇〇〇人受けて六・七人の合格者数に半ば諦めかけていました。よし、今回は自分の思ったようにいつも通りやってみよう！と心に決めての挑戦でした。それが結果的には無我無心での立ち合いに繋がったのだと思っています。遅い年齢での昇段ではなく、心・技・体、まさに今が八段位に相応しかったのだと私は思っています。これからは挑戦から昇段に至るまでに教えていただいたたくさん事を少しでも竹刀を介し伝え、秋田県剣道のために微力ではありますが尽くしていきたいと思っています。どうかこ

れからもご指導の程お願い申し上げます。

終わりにあたり、この度の昇段に際し祝賀会を催し、また記念品まで下さいました秋田県剣道連盟に心から感謝申し上げます。

居合道八段に昇段して

石田 純士

平成二十七年五月三日・京都で行われました八段審査会において居合道八段に昇段させていただくことができました。これも偏に諸先生・諸先輩皆様方のご指導とご支援の賜物と衷心より御礼申し上げます。

秋田県剣道連盟には、七月五日に鎌田耕平先生の剣道八段昇段とともに心のこもった祝賀会を開催していただきまして心より感謝申し上げます。また、祝賀会には多数の剣道・居合道関係者の皆様に御出席いただきましたことを紙面をお借りして御礼を申し上げます。

本県の居合道は、故浅利成和先生（居合道範士八段）が私財を投じて夢想館浅利道場を建てられ、普及のた

め中央講師の先生方を招聘して数多くの講習会を開催し全国レベルに近づけるためご尽力されました。その講習会の中で御縁をいただきました香川県の故岩田憲一範士八段に四十歳の時に師事し、以来二十年近く年に三〜四回香川に通ってご指導を賜り無双直伝英信流の研究と修行をしてまいりました。師匠の岩田先生が亡くなられた後は、新潟県の草間惇壹先生に師事し、全日本剣道連盟居合を中心審査に向けて稽古に励んでまいりました。その間、多くの全国規模の大会・講習会にも参加させていただき、多くの先生方のご指導をいただくとともに全国の剣友との交流を通じて八段審査に向けての思いを新たにしてまいりました。

居合道の八段審査会は毎年五月に開催される「全日本剣道演武大会」の期間中に開催され、京都市武道センターで年に一度だけ行われております。私は四回目の挑戦でした。審査前日には居合道の演武大会があり、錬士六段〜範士までの演武が行われます。審査を翌日に控えて、自分がどれだけ落ちていてこれまでの稽古の成果を演武できるかを試せるよい

機会と捉えて演武いたしました。

一次審査は全日本剣道連盟居合十二本の中から七本が当日指定されます。二次審査は各人が修行してきた古流から自由に七本を選択します。いずれも制限時間は八分間です。

一次審査においては、これまでご指導いただいて稽古してきた業を充分に出し切れるよう、また、八分以内に指定業七本を間違えずに抜ききるとの思いで臨みました。一次の合格発表を見たときは、二次に進めるんだ、これまで修行してきた古流を見ていただけるんだと、非常に嬉しく思った反面、緊張と興奮をどこかで押さえられるか心配でした。

二次審査では、古流の七本を丹田に気を込め腰腹を使ってゆったりと大きく抜ききるような心がけでした。合格者の番号の中に自分の番号があったのを見て、本当に受かったのか信じられない思いでした。その時の私の脳裏には、これまで修行してきた五十年間の様子が走馬燈のように頭の中を駆け巡り、ご指導いただいた多くの先生方、一緒に稽古した剣友に感謝の念が込み上げてきて、その興奮が止まりませんでした。



大阪居合道大会での演武

この度いただきました八段位は、あらためて居合道研究のスタートラインに立てたという思いです。今後は八段位に恥じることはないように、体の使い方や呼吸法を含め剣の理法の修練を通じて人間形成の道に励み、また、居合道の普及・発展のため精一杯精進する覚悟でございます。どうぞ、引き続き、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

受けねば 受がねど

元鹿角剣道連盟会長

熊谷 良政



1、はじめに

私は、過去に寄稿なされた豪華な剣歴をもつ先生方と異なり、試合での実績は皆無です。そんな素人ながら段位取得にのめり込み、何とか七段を取得しました。その過程でお世話頂いた先生達への感謝の気持ちを羅列させて頂きました。

2、私の剣道の関わり「血統はいいのだが…」

鹿角市花輪で生を受けた私が物心ついた頃、父良勝は剣道の専門家として皇宮警察で活躍しておりましたし、父の兄にあたる叔父乳井義博は「鬼の乳井」として仙台で剣道普及に尽力しておりました。後で聞いた話ですが、父と叔父は、昭和の剣聖と崇められていた高野佐三郎先生の道場「修道学院」の門を叩き、厳しい稽古を積んだと聞いております。

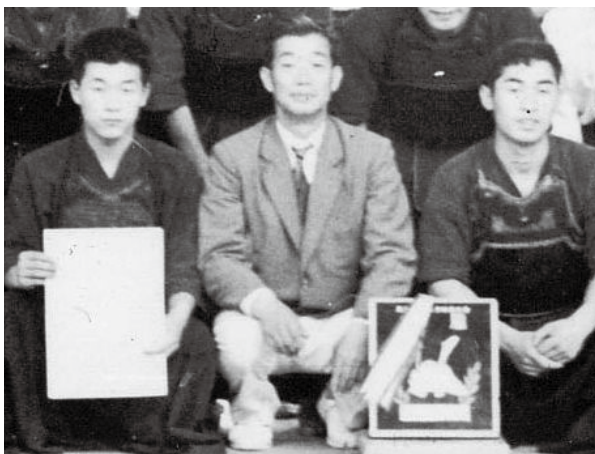
私は、血筋だけから判断すれば武道家の遺伝子が凝縮されて良いはずなのですが、母方の血で希釈された

らしく、運動と名のつくものは何をやっても駄目でした。

小学時代、父親の勧めで剣道教室に通ったものの直ぐに挫折、中学校・高校時代は竹刀に触れることすらありませんでした。

3、秋田大学での本田重遠先生との出会い

何を血迷ったのか大学に合格したのを機に自分の意志で剣道部に籍を置きました。しかし、高校時代にインターハイ等で活躍した猛者が占める中、小学校レベルの自分が通用するわけはなく、練習時間が近くなれば腹が痛くなることの繰り返しで、最後はとうとう退部のやむなきに



至ってしまいました。そんな落ちこぼれを見放すことなくご指導下さったのが本田重遠先生で、生まれて初めて本格的で厳しい稽古を体感させていただきました。また、部の懇親会においては、柔和な表情で「剣道」「酒」「人間の生き方」をお伺いしました。

その際、指4本を揃えて杯をもつ先生独特の仕草は今でも脳裏に焼き付いております。

卒業時に頂いたお言葉は、練習嫌いの私にぴったりの「生涯錬磨」でした。

4、六段・七段への挑戦

卒業後は地元の中学校に奉職、剣道部員との稽古が始まりました。当初は「先生随分下手くそだね」と馬鹿にされる始末でしたが、生まれて初めてまじめに稽古を続けた結果「先生少し強くなったよ」とほめられちよつぱり満足したものでした。

一段一段階段を登るようにして五段を取得した時はすっかり有頂天になってしまい、上の段に色気を出し始めていました。そんな折、段審査会で鹿角に來られていた檜山太郎先生から「熊谷君、受けねば、受けねど」と強く背中を押され、六段挑戦を開始しました。

何回か受験している内に「今の自

分では絶対に合格することはない」という現実を体感せざるを得ませんでした。そこで、当時の六段審査会場で審査にあたっておられた内山真先生宅へお電話を差し上げ、秋田市への通い稽古を開始しました。先生との稽古では、ほんの三〇五分で私の体力全てが出尽し、そこで、稽古が終了でした。最後に「勝負三本」と言われ立ち向った時は、先生の鋭い剣先に体がすくみ、全く動けませんでした。

最初の頃は道場の小学生にも叩かれる始末で、すっかり落ち込む日々でしたが、三年目を迎える頃には道場に通ってくる若い人たちとも何とか稽古が出来るようになりました。

また、時々興陽館にもお邪魔し奥山京助先生や檜山太郎先生、及び通ってくる若い方々から厳しい稽古を頂きました。そのかいがあつてか、札幌で行われた審査会に於いて、挑戦七回目ようやく六段の取得にこぎ着けました。

この通い稽古の際、内山先生からは、修道学院で私の叔父乳井義博には大変にお世話になった、というので、修行時代の内山真先生と叔父の乳井義博の「ツーショット写真」、修道学院で、高野佐三郎先生・高野茂義先生・高野弘正先生・乳井義博先生・佐藤貞夫先生・小島主先生・高中晃

先生・佐藤卯吉先生・小川忠太郎先生・鶴海岩夫先生から稽古を頂く時だけ使用したという貴重な「竹刀」を贈呈されました。



内山先生と叔父乳井義博

並みの剣道家は六段取得の日から七段に向かって更に厳しい稽古に入るので、年齢的に中間管理職を拝命して猛烈な忙しさが続いていたこともあり、まともな稽古時間を取れなくなっていました。しかし、七段の受験資格を得た四十三歳の秋、またまた性懲りもなく受験を開始しました。が、当然ながら不合格の山をうずたかく築き続けました。

それから十二年が経過、足腰の関節に痛みが走り思うような剣道が出来るなくなつた五十五歳時、自分の中に「何度受けても無理なようだから、ボチボチ受験をうち切ろう」という悪魔のささやきが大きくなるのを感じていました。ところが、期を同じくして「竹刀が止まって見える」と

いう奇跡的な現象が起き始めました。今冷静に考えてみると、自分が良かれと思つて続けてきた体力任せのチャンバラ剣道が体の故障により出来なくなり、結果、体が勝手に本来あるべき剣道へ「自動修正」したのかも知れません。

満を持して上京した平成十年十一月二十五日、日本武道館における審査においても、相手の起こりをしっかりと把握した稽古が出来、さわやかな気持ちで審査結果を待つことが出来ました。結果は？、張り出された模造紙にマジックで自分の番号がしっかりと記されており、思いがけない吉報に、周囲を気にすることなく目頭を押さえていました。「受けねば、受けねど」この言葉は剣道に限らず、全ての夢実現の原点なのかも知れません。

秋田全中に出場して

秋田市立秋田北中学校 鈴木 雄也

二年前。秋田北中学校、全県大会優勝。当時一年生であつた僕が、全国を知るきっかけとなつた大会です。先輩方のおかげで、見事県一位となることができました。苦しい練習に耐え抜いた自負と、「自分たちは勝てる」と

いう自信を携えて挑んだ全国大会。しかし、全国の壁は、そう簡単に破れるものではありませんでした。感じたことのないスピード、打ちの正確さ、足さばき。全ての技術において僕たちを上回っていました。結果は予選リーグ敗退。先輩たちの力になれなかった悔しさと、自分たちの力を過信していた未熟さを痛感したと同時に、必ず全国にリベンジすることを心に誓った大会となりました。

そして迎えた今年の夏。負ければ終わりの最後の大会がやってきました。「全国大会へ行きたい」その一心で練習を積み重ねてきました。決勝リーグに勝ち進み、いよいよ勝負の時。先鋒から大将まで気持ちをつなぎ、これまで練習してきたことを全て出し切りました。結果は準優勝。優勝こそ逃したものの、地元秋田で開催される全国大会の出場権を得ることができました。出場できる喜びをかみしめると同時に、秋田代表として一つでも多くの勝利を収めたいという気持ちが強まりました。

いよいよ全国中学校剣道大会当日。大勢の秋田県の皆さんの支えの中、男子団体予選リーグが始まりました。今まで学んできたことを胸に、これまでの全てを懸ける気持ちで初戦に臨みました。相手は島根県出雲第三中学校。私たちの持ち味である「ど

こかで一本。チームで繋ぐ一本。」を意識して、チームで戦いました。結果は引き分け。勝つことはできなかったものの、次の試合に繋がる剣道ができました。気持ちを切らすことなく挑んだ二試合目。相手は埼玉県北



本中学校。「ここで勝って予選リーグを抜きたい」という強い思いを全員がもち、お互いに鼓舞し合いました。その結果一本差で勝利し、ついに予選リーグを抜けることができました。その後の決勝リーグでは昨年度優勝校である神奈川県湘南田中学校と対戦し敗退してしまいましたが、全国ベスト16という結果を残すことがで

きました。

このような結果を残すことができたのも指導してくださった先生方、先輩方、保護者の方々の支えがあったからです。これからも感謝の気持ちを忘れず、剣道を続けていきたいと思っています。最後になりましたが、私たちが全国大会に出場するに当たって、たくさんの方の応援とご支援してくださった方々、本当にありがとうございます。

地元開催秋田全中出場

秋田市立土崎中学校 星野 真由子

「秋田で全国大会が開催される」ということを私は小学校六年生の時に聞きました。そのときから私は地元での全国大会に出場するという目標を立てました。中学校で女子剣道部へ入部したのは五人でした。私は目標を達成できるかもしれないと思いました。チームの仲間と同じ目標を掲げ、秋田全中出場に向けてスタートしました。

三年生になつての市中総体。優勝しようと試合に臨みましたが、結果はベスト8でした。このときはまだチームメイトの気持ちが始まりとまっていなかったのが敗因の一つと考えました。県中総体で見返してやる。この気持ちが仲間と一つになり、まと

まることができました。

最後の県中総体。市の大会で負けた悔しさが私たちを強くし集中力が途切れることなく決勝リーグまで勝ち上がる事ができました。チーム全員が一本をつなげようと心を一つにして戦いました。準優勝という結果で悔いもありましたが、それよりも秋田全中出場という目標を達成できた満足感が大きかったです。

全国大会に出場することになりましたが秋田県代表としてのプレッシャーや不安がありました。全国レベルの選手と戦うと思うと以前とは違い緊張感のある練習で一人一人の



意識の高さを感じました。日々の練習やたくさんの先生方との稽古を糧にして自信に替えていくことができました。

迎えた全国大会当日、いつもよりも広く感じる県立武道館。県内の大会では見ることのない観客の数。私たちは緊張感に包まれましたが仲間を信じ、自分を信じて試合に臨みました。予選リーグを勝ち上がったことはできませんでしたが、地元で行われた全国大会に出場することができ貴重な経験になりました。

「秋田全中出場」という目標、そしてそれを成し遂げることができたことは一生の思い出になることだと思います。目標を達成することができたのは、ご指導くださった皆さんの先生方、応援してくださった皆さんと一緒に戦ってきた仲間などたくさんの方のおかげです。今後も剣道を通じ、精神面や生活面を一回りも二回りも成長させていきたいです。

一刻千金

秋田大学教育文化学部附属中学校

沼田 翔奈

中国の古いことわざに「一刻千金」という言葉があります。私の中学三年間は、まさに千金に値するものでした。たくさんの出会いがありまし



たが、その中でも剣道を通じて出会えた仲間、先輩、そして先生方と一緒に過ごした時間は私の宝物となりました。

私たちが中学に入学した時にはすでに、二年後の秋田全中は話題の中心でした。もちろん全中への出場は、全県の中学剣士の憧れであり、目標であったと思います。しかし、秋大附中剣道部にとっては、どこか他人事のように感じられ、現実的な目標とは言い難いものがありました。始めは勝負へのこだわりが甘さの残る女子チームでしたが、徐々にたくま

しさが身につく、全中開催の年には精神面でひと回り成長していたように思います。それは、自然に身についたものではなく、寒暑を問わず稽古をつけてくださった先生方のおかげに他なりません。また、前年の全県大会決勝で、あと一歩及ばず全中を逃した経験も大きな要因であったと思います。その試合で私たちは一本の怖さと大切さ、そして悔しさを学びました。それを機に、不用意な一本を取られないことを心に刻み、チーム一丸となつて一試合一試合を大切に戦いました。持ち前の明るさと団結力で全県大会を勝ち抜き、更に東北大会をも制し、ついに秋田全中出場への切符を手にすることができました。結果は、女子団体予選リーグが一勝一敗で惜しくもトーナメント出場はなりませんでしたが、また、私自身、個人戦を三回戦で敗退してしまいました。しかし、全中ならではのハイレベルな戦いの中で、心の高ぶりやわくわく感、充実感を体験することができました。この貴重な時間もまた、「一刻千金」と呼ぶにふさわしいものでした。

このように、たくさんのすばらしい思い出に恵まれ、幸せな三年間を送ることができました。支えてくださったすべての方々に心から感謝したいと思います。

シリーズ道場紹介 第八回

■ 桂城少年剣友会 ■

● 師範または館長

指導者 戸田恒夫

● 所在地、電話番号

大館市字中城1番地

大館市立武道館

指導者電話番号

〇一八六―四二―五八三四（自宅）

〇九〇―七〇六七―二六〇六（携帯）

● 本道場の歴史

元警視庁武道助手で剣道範士の故泉通四郎先生が昭和四十二年に立ち上げた大館市剣道スポーツ少年団が母体となっている。昭和五十六年に剣道道場連盟に加盟するにあたり桂城少年剣友会という名称とした。

活動場所である大館市立武道館は、泉先生の市教育委員会への働きかけにより建設されたもので、昭和四十五年（一九七〇年）に完成、武道専用の公共施設としては県内で一番古いといわれている。当時解体された小学校の古材を柱として使用しており、かなり老朽化しているが、市が平成二十一年に柱や床などを補修している。

長い間団員数の減少に悩まされていたが、一、二年前から徐々に増え始め、やっとチームを組んで試合に臨めるようになってきた。

● 稽古日と時間

毎週月曜日、水曜日

午後五時～七時
毎週土曜日

午前九時～十一時三十分

●稽古内容と指導要点

正しい基本を身に付けることを目的に、大半を基本打突の稽古に費やしている。切り返しに始まり、基本技の稽古、打ち込みの後、最後に少しだけ地稽古の時間をとっている。小学生のうちは勝てなくても、中学生、高校生になつてから活躍できるよう、しっかりと正しい基本を身に付けることができるよう指導している。

●本道場の特色

市内全域から団員が集まつており、現在は六つの小学校の生徒が在籍している。家が道場から遠いため親に送ってもらわなければ稽古に参加できない団員が多いことから、稽古開始時間に全員がそろふことは少ない。また、初心者から経験者まで基本ひとりで指導しており、細かいところまで指導が行き届かないという面があり、指導の手伝いをしてくれる人を探している。不定期に来てくれる人はいるが、勤務時間等の関係で都合がつく人がおらずなかなか見つからないのが現状である。

近年、市内の中学、高校の剣道部員の減少が目立っており、小学生の数を増やすことによりそれを克服したいと思う、これまで同じ場所、時間帯で中学生と一緒に行っていた小学生の指導を、中学生を学校に戻す

ことにより小学生単独での指導に切り替えた。それが功を奏したのか、団員数が増えつつあり、これからの頑張りが必要と思っている。

●指導者数

一名（時間が空いた時に来てくれる人が数名おり、定着してくれることを願っている）

●門弟数

十五名（小一～小六）

●最近の主な試合成績

やつとチームを組んで試合に出るようになったばかりであり、これといったものはない。今後、頑張りたい。

●会費

父母の会費 月額 一〇〇〇円



■有武館 矢島道場■

五十嵐幸信

●道場主

由利本荘市矢島町矢島町一

由利本荘市矢島格技場

●歴史

矢島地域の少年剣道は、昭和三十一年代後半に「故 佐藤周之助先生」が小中学生を対象に指導を始め、以来、四十数年にわたり引き継がれています。

小学生はスポ少、また中学生は部としての活動に加え、県内外で錬成を積むため「有武館矢島道場」として「不動心」の道場旗のもと稽古しています。

●稽古日と時間

毎週火曜、木曜

午後六時二十分～午後八時

土、日（不定期）

午前八時半～午前十一時

●稽古内容と指導要点

幼年、小学生には基本を中心にそれぞれ年齢、経験に合わせたメニューで、また中学生以上には、少年と剣を交え、教えることから学ぶ大切さや、初めて剣道に触れた頃の気持ちを大切に感じてもらいたいという事と、全般的には技術に加え、特に精神面での向上に力を入れ、厳しさの中に楽しい剣道ができるような指導を行っています。

●本道場の特色

地域内の少子化は年々加速し、剣

道人口の減が懸念されることから、小学生への勧誘の他、保育園児の受け入れも積極的に行っています。

入団者には、小さい頃に始めた剣道を中学、高校、一般になつても続けたいという思いを持ってもらうため、指導者も一緒になつて正しい剣道習得のため、工夫しています。

また、矢島町は、小学校、中学校が各一校であり、保護者の会も「少年剣友育成会」として「小・中一体型」の組織で、地域一丸となった環境にあります。平成十七年度、全剣連より「少年剣道教育奨励賞」を授かりました。

数年前からは保護者も子供たちと一緒に剣道を始め、初心者ながら市内一般の大会に出場するなど、剣道への理解を深めてもらっています。

●指導者数 五名

●門弟数

幼年一名

小学生十六名、中学生十三名

一般女子（保護者）六名

●最近の主な試合成績

第四十九回本荘由利少年剣道大会

優勝 小学校男子団体・女子団体

第三十回秋田県道場少年剣道大会

第三位 小学校低学年

第十回内山杯争奪錬成大会

第三位 中学校団体

第五十六回芳賀光山杯剣道大会

優勝 小学校男子団体・女子団体

●会費 少年剣友育成会費として
年会費 一万円



▶平成二十七年全日本少年剣道錬成大会「日本武道館」において全国の選手を代表して選手宣誓を行いました。



セルビア剣道日記 (最終報告)

元秋田県剣道連盟事務局長 柏木 幹夫

秋田もいよいよ師走を迎えました。

JICA(ジャイカ、国際協力機構)シニア海外ボランティアとして派遣され、二年間、セルビア共和国において剣道指導を行ってきました。この九月末をもって任期が終了し、無事帰国することができました。これまで三回にわたり『セルビア剣道日記』を投稿させていただきましたが、ここに二年間の総括をして最終報告いたします。

平成二十五年十月一日、成田空港を出発し、中継地のドイツ・ミュンヘンを経由して、セルビアの首都ベオグラードのニコラテスラ空港に降り立ったのが、同じ十月一日の午後九時五分。乗継時間を含めて約十六時間のフライトでした。空港には、セルビア剣道連盟の前会長バヤさんと新会長コブチンさんが出迎えに来てくれており、ここから、私のセルビア剣道日記が始まりました。

セルビア共和国と言っても、日本ではあまり馴染みがなく、どこにあるのかもよくわからないかもしれません。帰国の際にセルビアの日本大使館に挨拶に行った時も、日本大使

から『日本に帰ったら是非、セルビアの宣伝をしてください。』と言われるて帰ってきたほです。

セルビアは、イタリア国の長靴のような半島の東側(地図では右側)のアドリア海を挟んだバルカン半島のちょうど真ん中に位置し、北にハンガリー、東にルーマニアとブルガリア、西にクロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナ、南に(大雑把にいうと)ギリシャに国境を接した大統領制の共和国です。国土は北海道と同じくらい、人口は七百五十万人、首都ベオグラードの人口は百六十万(京都市と同じくらい)の大都市です。公用語はセルビア語、国教はセルビア正教、在留の日本人はたったの百三十人。気候は日本と同じく四季がありますが、夏は暑く、四〇℃くらいの日も続き、冬の寒い時にはマイナス一〇℃以下になることもありました。(ただし、冬でもベオグラードはセントラルヒーティングが普及しており、屋内は快適です。『治安は大丈夫?』とよく聞かれますが、日本では中東の戦争状態が連想されているように感じられます。過

去には不幸で悲惨な内戦状態を経験し、NATOの爆撃も受けたセルビアですが、現在は政情も安定しており、治安も西ヨーロッパ諸国と変わりません。スリや置き引きは、大都市ではどこにもいるのでしようが、私もそれなりに安全には留意しておりましたが、二年間の生活の中で、スリにも合わず、身の危険を感じたことはありませんでした。

私たちの世代だと、『セルビア共和国』というよりは、社会科で習った『チトー大統領のユーゴスラビア』と言っ



た方が馴染み深い気がします。チトー大統領は有名だったですね。そのユーゴスラビアはセルビア、スロベニア、クロアチア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアの六カ国で構成する連邦共和国でしたが、チトー亡き後、政情は不安定となり、一九八九年のベルリンの壁崩壊（冷戦の終末）を契機として、その後、旧ユーゴスラビアの各国が

独立に向かい、連邦および社会主義は崩壊、セルビアも現在の小さな国土となりました。この間、一九九〇年代、独立に伴う民族問題を主因とする悲惨な紛争が長期化し、多くの犠牲者を出したのは未だ記憶に新しいところです。秋田県出身の明石康さんが、国連事務総長特別代表として派遣され、国連軍の指揮を執った紛争でもありました。

JICA海外ボランティアは、日本政府からの派遣で、公用パスポートを持って、公人の立場で出かけます。派遣される国を『任国』としておりますが、発展途上国に限られます。それぞれの国には、それぞれの国情があり、特にボランティアがその国の政治問題について発言することは、現地の人達と不要な摩擦を生じることあり禁止です。いかに剣道を通じて仲良くなった友人とい

えども、彼の紛争について私から聞くことはしませんでした。ただ、ニシュという地方都市に剣道指導に行き、紛争で亡くなった人たちの慰霊碑の前を通った時に、案内してくれたセルビアの若い剣道人が『アメリカはクラスタ爆弾を落としていった。小さな子供たちまでもがその爆撃で犠牲になった。』とボソッと云ったのが脳裏に残っています。

セルビア人の対日感情は他のヨーロッパ諸国に比べても良好です。ベオグラードでは、日本が援助した約百台の黄色いバスに、日本とセルビアの国旗がペイントされて走っています。他のバスは、あまり清掃も行き届いていないのですが、このバスだけはいつもきれいで、セルビア人の義理堅さが感じられます。稽古に行っていた体育館に近いドナウ川沿いのポップコーン屋のお兄さんは『どこから来た？ ニッポン？ オー、俺は日本を尊敬している！』と言って、日本円で四十円ばかりのポップコーンを大盛にしてくれます。私の住んでいた地域は旧市内に近いところで、東洋系の人はあまり見かけませんでした。『ニー・ハオ』と声をかけられたのは三・四回はあったでしょうか？ 生活面で、日本人として嫌な思いをしたことは一度もなかったよ

うな気がします。

私のJICA海外ボランティアとしての任務は、セルビア共和国青年スポーツ省所管のセルビア剣道連盟に配属され、セルビア剣道の競技力向上、剣道普及と技術の向上に努めるというものでした。セルビア剣道連盟には十三の剣道クラブが加盟し、約二百三十名が所属、常時稽古を継続している人達が百五十名くらいおります。有段者が約八十名、最高段位は五段が四名といったレベルです。幼少年も三十人くらいおりますが、



日本のようには多くはありません。年齢的には、二十代・三十代の人が多く、女性も二・三割、高齢者では五十歳代の人達が長老クラスと言えます。（この人達が約三十年前、旧ユーゴスラビア時代に何を間違ったか剣道を始めたとのことでした。失礼！）日本人の指導者は、私一名。私のことを『センセイ』と呼んでくれておりました。指導にあたっては、セルビア語も勉強したのですが、なかなか手に負えず、結果英語での指導となりました。剣道用語は世界各国、『もくそー・れい・めん・こて・どー・つき・はじめ・やめ』で通じますし、準備運動では『イチ・ニ・サン・シー・』と日本語でやっていますから、言葉の心配はほとんどありませんでした。

セルビアでの地方講習会、近隣諸国での剣道大会・講習会・昇段審査会に出掛けたことも楽しい思い出ですが、基本的には首都ベオグラードに住んで、ベオグラードにある三つの剣道クラブの巡回指導が私の主な仕事となりました。練習に参加してくるセルビアの剣道人たちは、本当に剣道が好きで、何でもこんなに日本から遠く離れたセルビアの人達が、あんなにも一生懸命日本の剣道に組んでいるのか未だに不思議でなり

ません。(日本の子供たちにも、外国にも一生懸命剣道に取り組んでいる人達がたくさんいることを知ってもらいたい気持ちでいっぱいです。)剣道のもつ何らかの魅力がそうさせているとしか考えられないのですが、何となく感じたのは、セルビア人質というものがあるとすれば、やや日本の武士道精神に似たような気質があるのではないかとということです。これは、十四世紀から約五百年もの間、オスマン帝国の支配下にあつて、これに抵抗してきた長い歴史的背景がそのようなセルビア人気質を形成していったのではないかと全く個人的な感想を抱いております。

任期中、大きなイベントとしては、この五月に日本武道館で開催された『第十六回世界剣道選手権大会』への出場がありました。また、ヨーロッパ選手権大会、近隣各国で開催される剣道大会・講習会・昇段審査会へ、審判・指導員・審査員として参加する機会にも恵まれました。その中で、現地の多くの剣道人や先生方とも知己を得られたことは大きな収穫であつたと思っております。ドイツ・フランクフルトの剣道大会に招待されて稽古をさせてもらったことがあります。五十歳代後半ぐらいの男性で、交通事故で両足に障害が残り、

正座も踏み込みもできません。それでも稽古を継続し、四段を受審されておりました。残念ながら合格はできませんでしたが、はたして私がその立場であつたら、稽古を継続できるかと思つた時、頭の下がる思いがしました。



二年間、外国から剣道を見る機会を得たわけですが、未だに疑問なのがある。『剣道は日本古来の伝統文化である。』ということと、果たしてこの伝統文化としての剣道が正しく海外において普及・発展・定着しているのかという疑問であります。私は、セルビアに行く前から何の疑問も抱かず、この剣道の本質ともいえる『日本の伝統文化としての剣道』をセルビア剣道人に少しでも理解しても

らいたいと思い、努めてきました。しかし、それが果たして正しかったのかどうか、整理できずにあります。技術的な指導は全く問題ないのですが、精神的なバックボーン(文化)の異なる国において、他国の文化を理解し、吸収し、自分のものにするということは容易なことではないということが、この二年間、異文化の中で草の根の生活をしてみて、よく解ったからであります。(そういう面では、貴重な経験となつたということでしょうか?)

世界に『日本の伝統文化としての剣道』を正しく伝え、継承していくことは容易なことではないということを実感しました。これは、今後の日本剣道のあり方にも影響するものだろうと思われます。

広い世界を見てみたい、観光レベルではなくして世界の人々と接してみたい、長く続けてきた剣道が世界ではどうなっているのかを直に知りたい、自身の剣道指導力がどの程度なのかを確認してみたい。こんな欲張りな想いで挑戦したJICA海外ボランティアではありました。

言うまでもなく、私のセルビアでの剣道指導の要諦は、私自身が秋田県剣道連盟の諸先生・諸先輩からご指導いただいたものにほかなりません。

そういう意味では、秋田の剣道をちょっとセルビアに残してきたことになりましょうか。皆様に感謝申し上げ、最終報告とさせていただきます。



お願い…セルビア剣道連盟では、今後、幼少年の剣道指導に取組みを強化しようとしております。つきましては、小中学生サイズの剣道具・稽古着・袴など押入れの奥に眠っているものがありませんか、ご寄贈いただければ有難く、お願いいたします。修理はセルビア剣道連盟が行います。(柏木)

二十七年 度八段・七段・六段・称号合格者



剣道八段
鎌田 耕平(秋田市)
京都・5月1日



居合道八段
石田 純士(秋田市)
京都・5月3日

剣道七段

加賀谷大輔(秋田市) 愛知・5月16日
伊藤 敏郎(湯沢雄勝) 宮城・8月22日
藤本 学(秋田市) 宮城・8月22日
宮腰 信義(大館北秋) 宮城・8月22日
鈴木 由克(男湯南秋) 宮城・8月22日
東海林一義(湯沢雄勝) 東京・11月25日
松井 正浩(横手市) 東京・11月25日

剣道六段

丸野内 潤(秋田市) 宮城・8月23日
佐藤 邦男(秋田市) 宮城・8月23日
石川 仁(秋田市) 宮城・8月23日
金森 康臣(能代山本) 東京・11月24日
桜庭 真人(大館北秋) 東京・11月24日
田山 恵子(大館北秋) 東京・11月24日
諸井 忠道(秋田市) 東京・11月24日
古野 博一(秋田市) 東京・11月24日

剣道教士

横山 茂生(由利本荘) 京都・5月6日

小林 俊夫(由利本荘) 京都・5月6日
中森 一男(大曲仙北) 京都・5月6日
山田 薫(秋田市) 東京・11月25日
菊地 重則(大館北秋) 東京・11月25日
永井 隆康(秋田市) 東京・11月25日
田口 和美(大曲仙北) 東京・11月25日
藤澤 範行(大曲仙北) 東京・11月25日

剣道錬士

鈴木 滋(秋田市) 東京・11月25日
土田 圭助(秋田市) 東京・11月25日
工藤 勇樹(秋田市) 東京・11月25日
加藤 健志(秋田市) 東京・11月25日
岩本 之正(秋田市) 東京・11月25日
高橋 清純(秋田市) 東京・11月25日
秋元かおり(秋田市) 東京・11月25日

居合道錬士

阿部 弘生(秋田市) 東京・11月25日

杖道教士

吉田 春喜(能代山本) 京都・5月3日
大原 哲雄(秋田市) 京都・5月3日

二十七年 度各賞受賞者

◎平成二十七年 度 全日本剣道連盟

「剣道有効賞」



小熊 一男
(秋田県高齢者剣友会会長)

「少年剣道教育奨励賞」

泉剣道スポーツ少年団

◎平成二十七年 度 秋田県剣道連盟

「幼少年指導奨励賞」

能代山本剣道連盟：能代第四剣道ス
ポーツ少年団

男鹿市・潟上市・南秋田郡剣道連盟：
昭和剣道スポーツ少年団

由利本荘にかほ剣道連盟：仁賀保剣
道スポーツ少年団

秋田県剣道道場連盟：勝平剣道ス
ポーツ少年団



戸塚徳廣 先生

船越俊幸 先生

羽生 剛 先生

二田徳弥 先生代理
青木崇洋 先生

平成27年度秋田県剣道連盟「幼少年指導奨励賞」を受賞
された指導者の先生方

二十六年 度各賞受賞者

◎平成二十六年 度 秋田県スポーツ賞

「功労賞」

向島 偕(秋田県剣道連盟医事顧問)

◎平成二十六年 度秋田県剣道連盟表彰

(功労賞・本田賞・小笠原賞・その他表彰)

*功労賞

該当なし

*本田賞

・第56回全国教職員剣道大会

団体 第三位

選手：後藤 俊明(秋田西高校)

湯澤 寛(秋田南高校)

鷲谷 和

島山 雄
(栗田養護学校)

山崎 洵(湯沢高校)

(能代養護学校)

山崎 洵(湯沢高校)

*小笠原賞

該当なし

*特別賞

・第56回東北・北海道対抗剣道大会

個人戦 準優勝

選手：山崎 洵(湯沢高校)

東北中学校剣道大会団体二連覇 そして全中へ!!

目 標

秋田市立山王中学校 高橋 舜

僕たちは山王中学校に入学すると同時に剣道部に入部し、その時から、一つの目標に向かって共に努力することを決意しました。その目標とは、「秋田全中での優勝」でした。

そうは言っても、まだ「全中」の実感などわかず、県内ですら勝つのは簡単ではありませんでした。そして少し「全中」への意識が薄れてしまっていた中、全国でも名門の、長崎県の島原高校の主宰する錬成会に参加する機会をいただきました。その錬成会はレベルがとても高く、全国区の学校が集まっていました。その中で試合をしているうちに自分達の未熟さを痛感し、全国への意識も取り戻すことができました。

そしてその二カ月後、秋田県中総体で個人・団体を制し、八月の高知全中に出場しました。僕たちは全国とのレベルの差に為す術が無く、ベスト16で敗退しました。しかし僕はその悔しさを、翌年の全中ではらすという次へ進むバネとして、ます

ます力を入れて練習に取り組みました。

そして僕は、全県・東北を2連覇し、再び全中への出場権を獲得しました。そして八月、いよいよ秋田全中の大会が開幕しました。

これまでこの大会のために遠征や練習を積んできた自分達自身で思い込み、地元開催をかなり意識したため、大きなプレッシャーに押し潰されそうでした。しかし大会には、体力面・精神面ともに万全の状態での臨むことができました。

試合では危ないながら予選を抜け、決勝トーナメント一回戦で優勝した九州学院中と当たり二一〇で惨敗しました。終わった後は涙が止まらずとても悔しかったです。しかしその後個人で木村が三位に入り、僕達が今までやってきたことは間違いでは無かったと確信しました。

「全中優勝」という目標はとても大きく重かったけど、それに挑戦できたことは、その先の人生の中で何かの形で生きてくると思っています。

僕は、今まで支えて下さった先生方やたくさんの方々への感謝の気持ちを忘れず、新たな目標を個々で

定め、その目標を達成するためにこれから日々精進していきたいと今決意しています。



全国中学校体会の選手宣誓



東北大会団体優勝

広報委員会からお知らせ

剣道人口の拡大を図るために各郡市で行われている大会の結果や、取り組みの状況をホームページに掲載していきたいと考えています。

情報がありましたら、記事の内容や写真などをFAX、できれば電子データで送ってください。

広報委員会ホームページ担当 保坂 徹
(連絡先) 秋田商業高校

TEL 018-823-4308
FAX 018-823-4310
E-mail hosaka@cyber.ocn.ne.jp

編集後記

平成二十八年三月二十九日から開催される魁星旗争奪高校剣道大会より、大会への申し込みの方法が変更になりました。参加各校は秋田県剣道連盟のホームページから大会要項や申込用紙をダウンロードし、メールで申し込んだあとに、正式な書類を郵送するという手順になります。

県外の大きな大会においても、この二、三年のうちに、このような申し込み方法に切り替わってきたそうです。

この電子化の流れに取り残されないよう、これからも頑張つて参る所存です。

編集

秋田県剣道連盟広報委員会

伊藤 隆、芳谷 正人

保坂 徹、辻 文彦

鹿子沢浩美、久慈 隆正